
電車と僕と夜母

紅月 セイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電車と僕と夜母

【Nコード】

N6500K

【作者名】

紅月 セイル

【あらすじ】

電車に乗る僕。
向かうは終着駅。
世界は揺れる。

ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン・・・。
電車は走る。

終着駅へ向かって。

ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン・・・。
電車が揺れる。

吊り革も揺れる。

人も揺れる。

そして、世界も揺れる。

終着駅への電車の中。

ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン・・・。
流れる雪景色。

見つめる僕の耳に流れるプレイヤーからの音楽。

不意に機械的なアナウンスが響く。

キイー・・・。

電車は止まる。

終着駅まで後2駅。

ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン・・・。

ちらちらと見えていた家々がぼつり、ぼつりと少なくなっていく。

電車の外では雪が降り始めていた。

不意に雪景色が消えた。

トンネルだった。

しかし、数秒後また雪景色が見え始める。

そして、家々が少し多くなる。

また、アナウンスが響いた。

キイー……。
次が終着駅。

ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン……。

先ほどまでは僕を入れて乗客は10人ほどいた。

しかし、今はもう目の前の老婆と僕の二人だけだった。

もう雪景色は見えない。

外は吹雪になっていた。

「あんたあ……」

突然、老婆が話しかけてきた。

僕は耳につけているプレイヤーのイヤホンを外す。

「何でこなあ時間にわざわざ大畠^{おおはたなき}風なんて家もねえとこさ行くんだ？」

少し訛り気味の老婆の言葉を聞き取る。

大畠風とは終着駅の名前だ。

そして、人家の全くない電車が眠るだけの場所でもある。

時計を見ると21時24分。

こんな時間に僕のような子供が終着駅に行くなど普通は不思議に思う。

しかし、それは僕もだった。

だから僕はこう返した。

「おばあさんこそ、どうして？」

「ほっ、ほっ、ほっ……。わしはなあ、こん先にあるちよつとした場所に用があるんよ」

「こんな吹雪の日ですか？」

「ああ」

「危ないんじゃないんですか？」

「まあ慣れっこじゃから大丈夫^{でえじょうぶ}、大丈夫。んで、あんたは何で行く

んじゃ？」

「僕はこの先の駅にいる父にお弁当を届けに行くんです」

「ほう、ほう。あんたんとこの父親は機関士さんか何かかのお？」

「はい」

「大変そうやのお」

「大変そうですが父はいつも楽しそうですよ。．．．いつも目を輝かせていつも大好きな鉄道のことを僕に話してくれます」

「．．．ええ関係だのお。あんた父親のことも鉄道のことも大好きだろう？」

老婆は微笑みながら続けた。

「そうやって話すあんたの目も輝いとるよ」

僕はにつこりと笑い返した。

気付いた時にはあの機械的なアナウンスが終着駅―大畠風への到着を知らせていた。

ゆつくりとホームに滑り込む電車。

「着いたのお」

「ですね」

僕は耳から外した音楽プレイヤーをポケットの中にしまう。

「さて、わしはそろそろ行こうかのお」

老婆は立ち上がった。

「おばあさん、本当に大丈夫ですか？こんな吹雪なのに．．．」

「．．．大丈夫じゃよ。ほれ、こっちでて見え上げてみ」

そう言つて老婆は僕を手招きする。

僕は先に電車を降りていた老婆に招かれながら外に出た。

そして、見上げた夜空にあったのは．．．

「綺麗な満月．．．」

満天の星と輝く満月。

綺麗な光達が僕を照らした。

いや、僕だけじゃない。

ホームに降り積もった雪も、その雪の中を駆ける動物も、雪の中から少しだけ顔を出す草花の芽も・・・みんな照らされていた。僕はその光景に息をすることも忘れ見入った・・・。

「おばあ、・・・？あれ・・・いない」

我に帰ったとき老婆はいなくなっていた。

そういえば・・・と、ふと思った。

あの老婆はいつのまに僕の前に座ったのか、と。

ずっと僕は目の前の窓から雪景色を見ていた。

その窓は老婆の座っていた後ろに位置している。

つまり目の前に現れると気付く筈だ。

斜め前には乗車口もある。

周りに座っていた乗客もほとんどいなかったはず。

つまり・・・老婆が目の前に現れたのに気づかないはずがなかった。

『たまたま気づかなかったのかな・・・』とっていると突然、機関士に声をかけられた。

「おーい、君、どうしたんだい？」

「あ、いえ、何でもありませんー」

そう言つて父へお弁当を届けに行くことを思い出した。

『早く行かないと・・・。怒られるなあ』

そう思い走り出そうした。

その時、気づいた。

僕の周りに・・・僕以外の足跡がないことを・・・。

後日、父親にこの事を話した所こんなことを聞いた。

「そいつは、多分『夜母』（よるのはは）だな」

「『夜母』？」

「ああ。大畠風に勤める機関士や時々来る乗客の間にある伝説のよ

うなもんだ。なんでも気付いた時には目の前に座っているらしくてな。知らないうちに自分の本音を引き出すんだと。で、気付いた時にはいなくなるらしい」

「何で『夜母』って呼ぶの？」

「そいつが出るのが決まって夜ってことと最後に絶対『夜空』を見上げさせるんだそうだ」

「・・・『夜空』を見上げさせる」

「ああ、そしてそいつは老婆だったって話が多いこともあってな。まっ、人伝に聞いた話だけど」

「・・・」

「でもまあ良かったじゃねえか」

「えっ？」

「そいつはお前に綺麗な物を見せてくれたんだからよ」

僕は電車に乗るたびに思い出す。

あの夜の老婆と話したことを。

あの夜の綺麗だった世界の全てを・・・。

（後書き）

2009/5/12本ブログにて掲載。

コンセプトは「短編、電車、情景、ファンタジー？」

こちらは運営しているブログで貰ったバトンの罰ゲーム用に作りました。

苦手なジャンルの小説をとということ・・・。

苦手なジャンルは？と考えたとき・・・

まずは短編ということ。

次に情景、そして、情景といえばファンタジーかなあと思いました。たまたま遠征のときに作った「電車」をコンセプトにした詩があったので

それを作り直してベースにして、コンセプトを詰め込んで完成しました。

最初（次は終着駅。らへん）までは詩なんですけど途中から小説にしています。

小説の中で考えたのは『夜母』の言葉遣いと展開です。

『夜母』も言葉遣いを訛らせすぎるとあまり流れがわからなくなるかなあと思ったこともあって中途半端にしています。

展開は当初、機関士から声をかけられるのを改札にいる父から声をかけられるという展開にしてみました。

しかし、その場合話をそこまで持つていかなければならないということがあると思い文章の長さを調整するためにもそこはカットした後日談にしました。

終わってみてもやっぱりまだまだへたくそだなあと思います。

自分の思っている情景、シーンを限りなく100%読み手に伝えればなあと思います。がそんなことはまだまだ無理なので100%といわずまあ50%でも感じてもらえるようにこれからも頑張りたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6500k/>

電車と僕と夜母

2010年10月15日20時52分発行